

亀

田中浩司

6月17日に、包括支援センターの職員が家にきて、父がどうして私と話をしないのか分析してもらった結果、「もともと話ができない人だから」と言われた。

私は生まれてから父と話をしたことはなく、それがコンプレックスだった。父は家にいるときは母としか話をしない。外でも話をしていると思う。

でも包括支援センターの職員は、私と父の間に入ってくれて、この家をうまくしようとしている努力はわかる。

これではいけないと思っただけから父に話しかけても反応のある言葉は返ってこない。いつも攻撃的で怒鳴っている。私は悔しい。いくら努力してもこの程度のものなのだ。

いくら努力しても父も母も亡くなってしまふ。小動物も亡くなってしまふ。ああ悔しい。そしていくら努力しても私も亡くなってしまふ。ああ悔しい。神などいない。死後もない。悔しい。悔しい。

そんなとき、新聞配達中に小亀をみつけた。雨の中、道にじっとしていた。私はカッパのポケットに入れて、家まで持ってきた。

家につき、小亀をポケットから出すと、喜んで私の手にまとわりついてきた。母は小亀を見て「かわいい」と言った。母は「お父さん、浩司が亀をつかまえてきたよ」と言ったが、父は見なかった。

すぐにいつも飼っている大亀の水槽に入れた。小亀は、オモチャのようにスイスイ泳いだ。小亀は大亀を後ろから突き、仲よく遊んでいた。母は何度も見に行った。

小亀を私の手に乗せ母にわたすと、小亀はじっと母の目を見た。この小亀は母にもなっている。母は「ほら、お父さん」と見せたが、父は振り向きもしなかった。

私は小亀が家にきてとび跳ねるくらい嬉しかった。毎日が充実していた。寝るときは小さな水槽に移した。小亀を見ると私の方に近寄ってきた。小亀は水槽を頭

でトントンと叩き、私に合図していた。そして私も寝床についた。

一週間して、会社へ行くときに、妙な気配を感じた。会社へ行くときは、決まって朝2時15分で小亀は眠っているのに、小亀は水槽を頭でトントンと叩いた。

新聞配達から帰ってきて、小亀の水槽を見ると小亀は仰向けになっていた。

包括支援センターの担当者は、あまりにも対応が悪かった。「お父さんは不器用。喋れ

ない。軍国主義の人」と言い、大声でケンカをしているみたいに強く私に言った。そして最後は、私を押さえ付けけるかのように「お父さんが死んだら浩司さんは後悔する。おわかりですか」と言った。内心、このオバサンはうるせえババアだなあと思った。

私は悔しくて悔しくて、甲府市長に葉書を書いて抗議した。その後、福祉保健部から「包括支援センターの職員との相談の場で不快な思いをさせてしまったことをお詫び申し上げます。」と手紙が届いた。

そんなことでは、始めから丁寧包括支援センターの職員は話せばいいのに。私は、甲府市も包括支援センターも、もうなにもかも信じられない。ああいやだ。いやだ。まったくいやになっちゃう。

新聞配達中その後、小亀をみつけた近くで、小型犬くらいのある大きな亀を見た。また、同じ所で、道の真ん中に大きなウシガエルがいた。私はウシガエルをつかみ、空地へ放してあげた。それらの生き物は、私にもしかしたら何か伝えたくて現れたのであろうか。

父は、アルコールの何かの病気であるようだ。毎日毎日大声で怒鳴るので、父と一緒に、父の主治医に会いに行った。血液検査をして、「あとすこしでアルコール性認知症になるけどいまのところはいい」と言われた。それから父の主治医と連携をして、父の状態を電話で伝えている。

一時は、市役所の障がい者福祉課の虐待担当者のお世話になっていた頃があった。私は精神障害の他に緑内障もあり、めがねをテーブルの上に置いて、眼圧を下げる点眼薬を目に差しているとき、父は酒に酔い、私のめがねをテーブルからポーンと手で投げてしまった。めがねは壊れなかったが、5万円もする。

また、私は精神を病んでいて、音が苦手なのに、二階の部屋から下へ下りてくると、わざわざ父は居間からトイレへ行き、用を足していないのに洗浄の音をさせる。

また、私が父のいる居間へ行くと、テレビのボリュームを最大限にさせる。

これらのことも父の主治医に伝えてある。あるときは父の主治医から紹介状を書いてくれると言われたが、直前になりダメであった。父を見てきていると、生涯にわたり私と関わりを持ちたくないようだ。